

# 読売 俳壇

## 高野ムツオ選

人はみな奇蹟を生きて花万葉

【評】平凡な人生も無数の不思議な巡りの合いや間一髪の違いの上になり立っている。この世に誕生したことさえ奇蹟なのだ。満開の桜を仰ぎながら実感している。

大月市 米山 明博

【評】冷たい水を両手で掬った瞬間の感受。重さではなく軽さと受け止めたところに発見がある。轉りまですりすべり落ちてくるようだ。信号を待っては頭上を花吹雪

向日市 阿部 和子

【評】会社へ出向く時だろうか、買い物帰りのだろうか。いずれにしても慌ただしい日常の一場面。花吹雪は冷冽な時間の流れそのもの。神の手を借りて叔種おろしけり

仙台市 齊藤 栄子

新緑に濡れゴンドラのすれちがふ

泉佐野市 布野 寿

米の値のいかにあらうと代田掻く

神戸市 吉野 勝子

花は葉に正門だけの母校かな

松山市 中矢 尚

## 小池 光選

はじめての我が投稿歌を添削のうへ採りくれし

【評】このたび長く読売歌壇の選者をつとめられた岡野弘彦さんが百一歳の高齡で亡くなった。偲ぶ歌がいくつも寄せられた。一首

東京都 土井紘二郎

## 正木ゆう子選

挨拶は夏帽に風容のるる

【評】中折れ帽を片手で一寸浮かせて挨拶するのは、紳士の動作。少し前まではそんな素敵な人が居たものだ。夏ならパナマ帽だろうか。「風容のるる」とは真にびっぴりたる表現。宇宙服脱ぎて畳まざる春の月

市川市 高野 厚夫

【評】服と言っても、宇宙服は人の形をした宇宙船のようなもの。畳めるわけがないが、俳句の中では畳む事を前提とするだけで、面白くなる。恋愛にたこ焼き必須夜店市

宇都宮市 松広 訓

【評】恋にたこ焼きが必須とは知らなかった。しかし、言われてみれば、と思う。気取らない夜のひとときを共に楽しむ。浴衣なんか、着て。土手近き家に生まれて蓬摘み

埼玉県 青木 雄二

入学の子と音読とパンケーキ

東大阪市 おかた卯月

音響くただただ燃ゆる春の山

岩手県 佐々木松男

酷暑日てふ新名称を決めて待つ

土浦市 今泉 準一

## 栗木 京子選

花の名に疎き我にも春は来てスマホに問うてそれによしとす

【評】スマホで花の写真を撮って検索すると名前が表示される。名を知ると花への愛情が深まるが、すぐに忘れて再検索することも多

浜松市 秋原 容子

## 小澤 實選

男友たちの条件蛇がさはれること

【評】この句の主人公の男友たちは、蛇に触れられないとなれないというのだ。季語「蛇」を用いた恋の句は珍しい。選者も蛇に触れられるだろうか、と自問してしまった。青葉寒だっことは断固拒否の猫

高岡市 池田 典恵

【評】人間に撫でさせるまではするが、抱かれるのは拒否する猫はたしかにいる。想像の猫の句ではない。現実の猫の存在を感じた。ティッシュ開けばががが「れ」逃げぬから

長崎市 鍋冠ミユル

【評】ティッシュペーパーを開いたら、昆虫がががが「れ」の字のあたりで挟まっていた。逃げもせずたやすくつかまる。「れ」も巧み。酒盛りや紫雲英畑に真塵敷いて

入間市 松原 正憲

にはたつみはしにあつまるはななくつよ

大野城市 野分 のわ

ほろり泣く朔太郎忌のマンダリン

大津市 星野 暁

玉の井に迷いこむなり荷風の忌

川越市 小畔川 霞

## 俵 万智選

方言につられて話す方言を連弾のように聴く同窓会

【評】無沙汰している方言も、古い友人に会うと徐々に復活する。それにまたつられて別の人からも方言が……その連鎖と響き合い

横浜市 紺屋 小町

## 津川絵理子選

はじめての名刺を供へ新社員

【評】「供へ」にハッとさせられた。亡くなった人へ、自分は今もこんな成長したのだと報告し、社会人としての自覚を新たにしたい。新社員の句として異色で発見がある。藁一歩イランのいくさやめなさい

下妻市 神郡 貢

【評】人間が止めないのなら、と藁が一歩前へ出て鳴く。あの鈍い鳴き声はこう言っているのだという想像力と、ユーモアが良い。食ひ初めの口へちよこつと桜鯛

川越市 益子さとし

【評】焼き鯛の身をほぐして食べさせる。大きな桜鯛の身を、ほんの少し。「ちよこつと」が可愛い。赤ちゃんの小さな口のめだたさ。越後より笹団子来る子どもの日

さいたま市 関根 道豊

甚平や持たず属さず論はず

八王子市 徳永 松雄

強く生き優しく老いて春田打つ

行田市 永沼規美雄

途中から来てよく喋る溝後へ

松原市 たろりずむ

## 黒瀬 珂瀾選

岡野氏の世を去りてなほ耀へり添削うけし文語の調べ

【評】先の4月24日、前読売歌壇選者の岡野弘彦さんが亡くなられた。本欄には岡野さんの薫陶を受けた人も多からう。歌人は世を去

足利市 熊田 敏夫

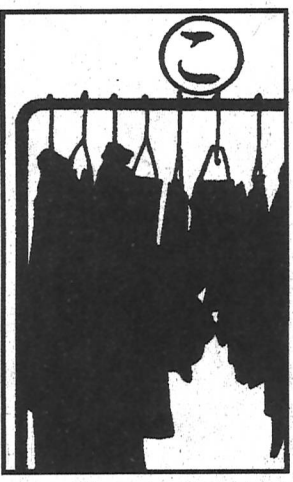
## 枝しおり折

高柳路子歌集『雑霊のシナプス』著者久々の歌集。言葉同士の間意外な補助線を引く。泳ぎまわれ星空シナプス光らせて 短歌の上半身下半身（左右社、2640円）

岡野はるみ歌集『朱色の点描』漫然と見過ごしそつな光景を言葉によって明確に捉え直す。著者の第1歌集。へよつてきた鯉に与えるものがなく手を動かせば光を食べる（現代短歌社、2750円）

川田ゆかり歌集『ハムの少ないハムサンド』負の感情をもユーモラスに詠むしたたかな第1歌集。へよつてきた上司によればサスペンス劇場となるオフィスの一角（KADOKAWA、2640円）

丹羽真一歌集『猫の立ち寄る家』著者の第5句集。写生句が中心だが、「心象句がいくらか混入してきた」とあとがきに記す。へよつてきたことも案山子の役どころ（本阿弥書店、3080円）



題字デザイン・イラスト 福田美蘭

選者 岡野弘彦 媒体 読売新聞 歌集 俳壇 発行 毎月15日 定価 100円